

「自然なお産」の誕生

——『助産雑誌』の事例から——

立教大学 橋迫瑞穂

【1. 目的】

本発表は、現代日本社会において「自然なお産」がどのように作られてきたのかを、助産に関する情報を掲載してきた雑誌、『助産雑誌』（旧：『助産婦雑誌』）を手がかりに検討する。近年日本社会には、オーラやパワースポット、ヨガなどといった「スピリチュアル」な事柄を売買する、「スピリチュアル市場」が形成されている。そのなかで、「自然な」妊娠・出産、さらには育児が神聖視される傾向にある。「自然なお産」とはこの場合、無痛分娩や帝王切開などを含まない、経膈分娩が主に「自然なお産」とされている。「自然なお産」が神秘的であり、神聖な体験として強調されることもある。しかし、「自然なお産」の実態はあいまいで、漠然としている。一方で、「自然なお産」を形作ってきた、助産師や産婦人科医などの医療関係者の役割を見逃すことはできない。そこで、『助産雑誌』を分析することで、「自然なお産」の意味や価値について明らかにする。

【2. 方法】

1970年代からの「助産雑誌」のなかで、「自然」がどのように助産師や、医師、さらに助産にたずさわる人々によって位置づけられてきたのかを、内容分析を通して検討する。

【3. 結果】

70年代の『助産婦雑誌』には、戦後の時代を経て、急速に出産の医療化が進むなかで、アメリカにおける出産観への反発が見られる。これは、戦後においてGHQの主導のもとに、助産婦制度を撤廃しようとしたことへの反発と見られる。そのなかで、当時のアメリカで一般的になりつつあった無痛分娩などが、「不自然」な出産方法として批判的にとらえられている様子がうかがわれる。

他方で、社会問題であった公害問題や、生活環境の変化などが妊婦に与える影響について、たびたび議論となっていた。また、新しい世代の母親たちの意識が、昔と異なっていることを疑問視する声も、『助産婦雑誌』から読み取ることができる。他方で、ウーマン・リブが盛んになるにつれて、出産や助産をどのように位置づけるべきかという議論も行われたことも、「自然なお産」の誕生に影響を与えている様子もうかがわれる。

【4. 結論】

出産をとりまく時代の変化が、「自然なお産」という体験のカテゴリーを生み出してきたと考えられる。他方で、こうした潮流が助産とナショナリズムの結びつきや、「スピリチュアル」な体験としての出産につながっていったと推測される。そうした点について、議論していきたい。